

優秀賞

手本になると決意した日

常盤木学園高等学校 1年 吉田 紫乃

「今度は何、何があったの？」

中学校の頃、私が所属していた吹奏楽部では、度々いさかいが起きた。理由は、後輩が挨拶をしなかったとか、反抗的な言い方をされたとか、実に些細なこと。部長の私はその度に仲裁を求められたが、双方の主張に挟まれて簡単に解決に至れなかった。

暗中模索の中、私は母に相談してみた。母はしばらく沈黙した後、「まずはあなたがしつかり見本になりなさい。」と、静かに言った。

数日後、またしてもいさかいが起きた。私は平静を装って練習に没頭しようとしたが、全く気が乗らない。度重なるトラブルで、心が不愉快で仕方がないのだ。私は思わず、

「いい加減にしてよ。」

と乱暴な口調になった。私は当事者達の不機嫌そうな顔を見て、「言ってやった」と清々する気持ちと、「言ってしまった」という焦りが入り混じって動揺した。

その晩、私は冷静に自らの発言を振り返った。あの時怒りに任せて怒鳴ってしまったが、本来なら私が誰よりも心を整えて冷静になるべきではなかったか。いさかいの張本人に注意を喚起すべきなのに、私は双方の気持ちを逆撫でただけに過ぎないのではないか。そう思った時、ふと母の言葉が蘇った。これでは皆の手本になれないな……。自分の不甲斐無さを痛感した。

私はその日を境に、挨拶や会話を笑顔で丁寧にするよう心掛けた。それは、いさかいを些細なことだと軽視していたことが、そもそも間違いだと気付いたからだ。「親しき仲にも礼儀あり」という言葉の通り、挨拶は最低限の礼儀作法だ。また、相手の気持ちを汲んだ言葉遣いで丁寧に話すことが、トラブルを未然に防ぐことにつながると思ったからだ。

数日後、物静かな後輩が初めて笑顔で挨拶してくれた。その時の嬉しさは、私の心の成長の糧となり、今も心の指針となっている。